
Angel Beats! ~ alive ~

朝人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! ～alive～

【Nコード】

N2933M

【作者名】

朝人

【あらすじ】

Angel Beats!の二次創作です。

オリ主物ですが、原作沿いではなくオリジナルの展開になります。

注意事項

これは自分がAngel Beats!の最終回を観た後、不意に思い浮かび勢いで書いた物です。

最終回の後の話です。

オリ主物ですが、原作沿いではありません。でも、オリ主はゆり達とはあの世界から知り合いという設定です。

多分、感動はありません。ギャグやコメディ中心だと思います。

自分自身、この作品の終わり方が見えていません。

キャラ崩壊とか起こすかもしれません。

以上の事を踏まえた上で「良いよ」という方はどうか目を通して見て下さい。

プロローグ（前書き）

勢いで書きました……その為誤字脱字等があるかもしれません。

ブローグ

俺は不定期に不思議な夢を見る。

それは俺と、俺の幼なじみの夢なのだが……。

どういう訳か、その夢に出てくる場所には一切の見覚えはなく、行った事すらない何処かの学校の体育館だった。

しかし何故か懐かしいと思える、そんな不思議な夢。

そんな体育館の中で、俺と幼なじみを含めた数人が何かを言っている。

何を言ってるのか分からないが、それを言った後、人が消えて行く。そして、それは俺達の元にも回って来る。

「俺が……」

そう言う前に彼女が手で遮る。

彼女は、まず近くにいた小柄な少女を抱きしめ、何かを言う。泣いている様だが、悪い意味ではないと思う。

次に俺と同じ位の背の男子に話しかける、随分とさっぱりと言った様な気がするが、彼女らしいと言えば彼女らしい。

「……………」

そして、最後に俺……。

俺の前に来ると彼女は止まり、視線を合わせる。長い様で短い沈黙は長くは続かなかった。

「……ッ!」

不意に、彼女が俺に抱きつく。

現実ならあり得ない事だが、此処は夢だ。

……しかし、夢とはいえ……彼女がとてつもなく愛しく、そしてそれに反する様に寂しいと思う気持ちが内側から溢れてくるのは何故だろう……。

「ん……」

その気持ちに応える様に、身体が勝手に動き、彼女の唇へとキスをする……現実でやったら確実に殺される事間違いない。

だが、夢の中の彼女はそれに抵抗せず、寧ろ受け入れている。

……本当に、現実とは別人の様だ……。

キスが終わると、彼女が俺から離れる。

（ああ……そろそろ終わりか……）

そう思ったのは、一体どっちの俺なのだろう……。

夢の中の俺か？

それとも、現実の俺か？

どちらにしても、この夢は終わる。

『彼女が俺から離れた』これが意味する事は一つ、そしてこの次に起きる事がこの夢の終点だ。

彼女は大きく息を吸うと、にっこりと……本当に見惚れてしまう様な、綺麗な笑顔で最後の言葉を言う。

『待つてるからね』

そして、彼女は消えて行く。

夢とともに、光の中へと……。

プロローグ（後書き）

苦手な一人称視点でやってみたので、上手く出来たか分かりません。
一応、ゆりをヒロインにしようと考えています。

一話（前書き）

ゆりの言葉使いが不安です……何か違うと思った方は教えてください……。

一話

「ほら、さつさと起きなさい」

「ん……」

カーテンの開く音が聞こえ、顔に日差しが当たる。

誰かの声が聞こえる。

誰の声か考える前に、眠気が襲う。

眩しかろうが、うるさかろうが関係ない、今は眠い、だから寝る。

ハイ、脳内満場一致の自己完結で完璧OK。

……おやすみ……。

「はあ……まったく……コイツは……」

誰かがため息を吐きながら呆れている様だ。

……まあ、だからといって起きる気はないが……。

ああ……ホントに眠い……。

「ぐう……」

……。

……。

「……へエ、このあたしが直直に起こしに来てやったつてのに……」

カチャ

……。

……ん？ 起こしに来た……？
『このあたしが直直に』……？
……それに、この音は……！？
……まさかッ！？

「一遍……死んでこおおおおい！！！！」

「ぬおおおおおおおおお！！！！？！！？！！」

身の危険を感じ、俺は持てる力全てと反射神経でベッドから左横へ跳び、回避運動を取る。

それとほぼ同時に、俺の頬を何かが掠め枕を貫く。

その際『ヒュン』という、まるで空気を切る様な音が聞こえた。

「あだッ！？」

回避その物には成功したが、着地は失敗し、肩から床に叩き落ちた。痛い、アレを喰らうよか遥かにマシだろう……。

「チッ……外したか……」

見上げてると、そこには案の定制服姿の『彼女』がいた。

「外したかじゃねえ！！ どんな起こし方だ！？ 危うく天国に行くところだったわ！！」

「大丈夫よ、只のモデルガンなんだから」

「ほら」と言つて、手に持っていた銃を見せる。

いや確かに、本物じゃないけど……。

「枕貫通してるんですけど!?!」

先程犠牲になった枕を指差す。

青一色が特徴の、夜の相棒の腹に一点の黒い穴がぽっかりと……。

「改造して威力が上がってるんだから、当然よ」

「お前そんな危ない物で俺の頭狙ったのかよ!?!」

「大丈夫よ、ちょっと頭が凹む程度だから」

「十分凶器だろおおおお!!!」

綺麗な笑顔で物騒な事を言う彼女に、俺は叫ぶ。
冗談じゃなくホントにヤバいって……。

「ゆりちゃん、ウチのバカ息子起きた?」

俺が彼女 仲村 ゆりを睨み付けていると、不意に下から声が聞こえた。

ちなみにウチは一戸建ての家であり、俺の部屋は二階にある。

「はい、おばさま。今起こした所です」

その声 俺の母親にゆりが応える。

「じゃあ、ゆりちゃん。少し手伝ってくれないかしら?」

「今行きます」

そう言うつもりはモデルガン（改造済）をしまい、部屋を出る。
だが、その直前で止まり振り返る。

「早く着替えて降りて来なさいよ」

それだけ言うと今度こそゆりは出ていった。

「はぁ……」

それを確認すると自然とため息が漏れた。

朝から叫んだので喉が痛い、ツツコミ過ぎて疲れた……。
それと……。

「……やっぱり、別人だ」

やはり、夢とは違う。

アイツがあんな事……。

「……止めよ」

思考停止。

夢とはいえ、幼なじみとあんな事をした等思い出したくもない。

「……黙ってれば、かわいいのに……」

不意に出た言葉に後悔した。

何言ってたんだ、俺……。

気でも狂ったか？

おかしい、アイツに対してそんな感情は持っていないはずだ……。

昔から一緒にいた、言うなれば兄妹みたいな物だぞ……？

……そうか、あの夢か……。あの夢のせいでそんな変な事考えてしまったんだな？

「……………着替えよ」

自己暗示をし、なんとか落ち着いた俺は着替えを始めた。

こうして俺 木戸 良司の日常が今日も始まる。

二話

「いつてきます」

着替えが終わり、朝食も食べ終えた俺は学校に向かう為家を出た。

「遅い」

そして、出て少しした電柱の所にいたゆりと合流（？）。

俺とゆりは家が近いという事もあり登下校は大半いつも一緒だ。もつとも、それは『幼なじみ』という関係上一緒に行動しているだけなので、桃色な空間や甘い時間なんてのはまずないだろう。

……それにしても、開口一番が『遅い』って……。

「それでも、結構早くしたつもりなんだが……？」

着替えや朝食以外にもやる事はやったし、準備する物もした。それらを15分弱で済ませたんだから早い方じゃないか……？
ちなみに、ウチの朝食は和食が主なので食うのが大変です……ついでに、急いだ為腹がちよつと……。

「あたしはとつくに準備が出来て待ってたのよ、少しは待つ方の事も考えなさいよ」

「あー……悪い」

ゆりは家庭の事情で、普段から俺よりも早く起きている。

朝が苦手な方である俺は、そんな感じで早起きなゆりさんにいつも

起こされているのである。

……まあ、ちよつとやそつとじゃ俺は起きない為いつも過剰な起こされ方をするのだが……羨ましいと思ったヤツは今すぐ代わってくれ。

「こんなんだつたら昼抜きにしようかしら？」

「……なッ！？」

なにやらヤバ気な事を言ってるんですけど！？

青い布に包まれた四角い箱の様な物を持ちながらため息を吐いてる。

「俺に死ねと！？」

「大丈夫よ、たかが一食抜いたくらいじゃ人間死にはしないから」

確かに、そうだけどさ……。

でも、学生にはかなりキツイ！！ しかも、今日の午前の最後は体育だったはず……。

運動したのに昼抜きでそのまま午後へGOですか？

……死にます、確実に。

「……………」

「…………… ああもう！！ 冗談よ！！ そんな事しないわよ。だから、そんなこの世の終わりみたいな顔しないでよ！！」

「ほら」と多少乱暴にだが、弁当を俺に差し出す。

「ゆ〜〜り〜〜」

「……ッ!?」差し出された手ごと弁当を引き寄せる。

情けない声が出たからか、多少引かれた気がしないでもないが、俺にとってはそれだけありがたい事なのだ。

何せ、常日頃から家事を行なっているゆり、そんな彼女が作る飯が不味い訳がなく、お世辞抜きでかなり美味い!!

高校に上がって昼飯が持参や自腹になってからは、何故か『ついでに』俺の分の弁当も作ってくれるのだが……理由はどうあれ、ゆりの手料理を食べるのはかなり嬉しい。

「もう!! さっさと行くわよ!!」

弁当だけを渡し、俺の手を振りほどくと、ゆりはそのまま先に行ってしまった。

「あ、待てよ! ゆり!!」

弁当を鞆の中に入れると、俺は慌ててゆりの後を追った。

二話（後書き）

やっぱり、一人称難しい……悪戦苦闘して十日も掛かった上に短かった……。

でも、こっちは一人称で頑張ってみようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2933m/>

Angel Beats! ~ alive ~

2010年11月14日12時52分発行